

ことばの学びの中継点として —多様性，主体性，開放性を もった CJL へ—

日本語教育研究センター所長 舘岡洋子



1. はじめに

現在，早稲田大学は，5084名（2015年11月1日現在，以下同）の留学生を受け入れており，日本国内の大学としては最人数となっています。そのうち2,157名が日本語教育研究センター（Center for Japanese Language；以下，CJL）で日本語科目を履修しています。CJLは，早稲田大学における日本語教育を一元的に担い，日本語学習者のために毎週650コマの授業を開講し，190名のティーチングスタッフがそれを支えています。

2014年度，早稲田大学は，文部科学省の「スーパーグローバル大学創成支援事業」において，世界ランキングトップ100を目指す力のある大学を支援する「スーパーグローバル大学創成支援トップ型」に採択されました。それを受けて大学の国際化はさらに加速しており，今後，留学生数増大の傾向が続くものと思われます。その中で，CJLの担う役割も大きくなっていると同時に変わってきているという背景をふまえて，現在のCJLの特徴をとらえ，さらに今後の課題を示したいと思います。

2. CJLの教育活動の特徴

冒頭に述べたように，大規模な展開をするCJLですが，プログラムの中身については本誌第2号および第3号に詳細な説明がありますので，重複を避け，ここではCJLの教育活動の特徴にしぼって述べることにします。現在のCJLの特徴として，2点—「多様性」と「主体性」—をあげ，これらに加えて，今後，今まで以上に「開放性」が重要になっていくことを述べたいと思います。

2-1. CJLの「多様性」

CJLの第1の特徴としてあげられるのが多様性です。まず，科目群の多様性です。CJLの科目は，一般的な日本語カリキュラムを体系的に整えた「総合科目群」と，特色ある独

自のシラバスを提案し採用された教員が担当する「テーマ科目群」の2本の柱で成り立っています。前者の「総合科目群」は、初級から中級の学習者を対象に、標準化されたシラバスと教材によって、四技能をバランスよく学ぶ科目です。後者の「テーマ科目群」は、俳句や演劇といった創造性豊かなものから日本企業への就職に役立てようとする実用的なものまで、個性豊かな幅広いテーマで科目が展開されています。テーマ科目に付されたキーワードをみても、「読む」「話す」など言語学習の四技能を中心としたものや「発音」「語彙」「文法」などの言語要素に関するものにとどまらず、「理系」「映画・ドラマ・演芸」「創作する」「仕事」「生活」「自分」など、専門的なものや芸術に関するもの、実用的なものなど、多様であることがうかがえます。「総合科目群」と「テーマ科目群」というCJLにおけるカリキュラムの2本の柱は、前者は、留学生数の増加に対応すべく高い質をもった授業を安定して提供するという「安定性」を保証するものとして、また後者は、多様な学習者たちの興味や関心に応えつつ言語教育としての「先進性」を重視したものとして整えられてきました。

これらの科目群の多様性に加え、学習者たちの多様性もCJLの大きな特徴となっています。世界中の105の国・地域からの留学生は、それぞれ多様な専門性をもった学部生、大学院生たちであり、またビジネス経験をもっている学習者もいます。今まで育った環境も違えば関心をもって学んでいることも違います。また、多くの日本語授業には、日本人学部生や大学院生がボランティアとして参加していることも、大学の中にあるCJLの強みといえます。異なったことは、文化、経験など、多様な背景をもった人々が学び合うCJLという場自体が「リソースフルな学習環境」、つまり、互いに学び合える学習材料が豊かにある場といえるでしょう。

2-2. CJL 学生に求められる「主体性」

CJLの第2の特徴は、主体性の重視です。CJLでは、プレイスメントテストによる各自の日本語レベル判定を参考に、学習者が自分に合ったプログラムを組み立てます。先にあげた「総合科目群」と「テーマ科目群」の中から、それぞれの目標や興味、関心に応じて科目を選択し、自分にふさわしいプログラムを自分自身で構築するのです。こうした「私のプログラム」を提供することこそ、CJLの主体性重視を端的に表したものだといえるでしょう。

一方、いきなり自分で科目を選択して「私のプログラム」を作成することに不安を覚える学習者が存在することも確かです。そこで、学習者のこのような主体的な学びを支えているのが、「わせだ日本語サポート」というサポートシステムです。「わせだ日本語サポート」は、早稲田大学で学ぶ留学生の日本語学習や留学生生活を応援するために、2011年に設置され、日本語教育研究科の院生たちがスタッフとして支援活動を続けています。「わせだ日本語サポート」では、日本語学習に関するさまざまな情報が得られたり、日本語そのものに関する質問ができたりすることもさることながら、日本語の学び方等について相談ができることが大きな特徴となっています。自分自身の日本語学習の方法や計画について、スタッフといっしょに考えることによって、学習者それぞれが自分の学習に関して、さまざまな気づきを得て、自身の学習を主体的に進めていくことができるようになります。

す。院生たちが質問にすぐに答えてくれる便利な場所でもあります。むしろ、自身の学び方についていっしょに考えてもらう場となることこそがめざしていることなのです。設立当初は、専用の場所がなく、多くのCJLの授業が開講されている22号館の空き教室を使って開催されていました。2012年にやっと22号館8階にサポート専用の部屋が確保されましたが、窓のない部屋で、しかも8階まで上がってくる留学生も多くはありませんでした。その後、2014年に同じ22号館内の3階にある学習ラウンジWILL (Waseda International Learning Lounge) 内の日の当たる部屋に移転しました。それは同時に「わせた日本語サポート」の活動自体にも日が当たってきたということができるでしょう。今後は、院生だけではなく学部生もサポート活動が担えるように、2016年度からは、CJL教員たちによってグローバルエデュケーションセンター (GEC) に全学の学部生向けの「日本語学習アドバイジング」という科目が開講されます。多様な留学生が主体的に学ぶことを支える場として、「わせた日本語サポート」は大きな役割を担いつつ、これからも成長を続けることになるでしょう。

3. 今後さらに求められるCJLの「開放性」—ことばの学びの中継点として

全学の中長期計画である「WASEDA VISION 150」では、外国人学生数1万人という数値目標が掲げられています。今後は、さらに留学生数の増大が見込まれる中、全学の日本語教育機関としては、多様性と主体性に加え、第3の特徴として開放性をめざしていくことが重要ではないかと考えます。留学生にとって、日本語を学ぶことは最終目的ではありません。CJLで学んだあと、学んだ日本語を使って、各学部や研究科、あるいは就職先の企業で自身の可能性をさらに伸ばしていくことになります。したがって、CJLとその先の機関等との連続性ということがきわめて重要だと考えます。CJLという場合は、日本語が十分でない留学生を集めて集中的に日本語の授業を提供し、あるレベルになったら外に送り出す、という閉鎖的な場であってはならないと思います。CJLが開放性をもって学内の他箇所や学外、社会と連携し、その中継点としての責務を果たしていくことは、今までにも増して重要となってくるでしょう。CJLは日本語を学びたいすべての留学生たちに向けて、多様なプログラムからなる豊かな学習環境を提供し、彼ら／彼女らには主体性をもってその場を利用し、早稲田大学という大学で自分の夢を果たしていったほしいと思います。

また、CJLでは、留学生と日本人学生とに二分しないという意味で、両者の垣根をなくしていく開放性も必要だと思います。たとえば、先述の学部生向けのGEC科目「日本語学習アドバイジング」の授業を経験して育ってきた学生たちは、「わせた日本語サポート」のスタッフとしてばかりでなく、早稲田大学とともに学ぶ者として、自身の所属学部など身近にいる留学生たちをサポートし、互いに学んでいくにちがいません。全学でそのような学生が増えることこそ、留学生と日本人学生がともに学ぶことができるグローバル大学だといえるのではないのでしょうか。そして、留学生は「日本語が十分にできない」「支援されるべき」人々ではなく、いっしょに協力して学び合うべき人々であることに体験的に気づいていくことでしょう。先にあげた多様性や主体性をCJLの中だけに閉じ込めておくのではなく、全学で豊かなことばの学びが起きるように、CJLはその中継点としての

役割ももっているのだと思います。

今後、留学生1万人計画に向けて、各学院では、日本語のレベルもさまざまな留学生たちをさらに増やしていくことが予想されます。英語で学位がとれるプログラムも増えてきており、CJLで学ぶ日本語学習者も初級層が増加するなど、その構造はかつてとは変わってきています。初級から上級、超級の学生まで、また日本人の学生もふくむすべての学生にとって、CJLという場が、ことばを学び、ことばによって人と人がつながる経験をする場となることを願っています。

(たておか ようこ、早稲田大学国際学院)